

人形使い

豊島与志雄

青空文庫

むかし、ある田舎いなかの小さな町に、甚兵衛じんべえといういたって下手へたな人形にんぎょう使つかいがいました。お正月まつだのお盆ぼんだの、またはいろんなお祭まつりの折おりに、町の賑にぎやかな広場ひろばに小屋こやがけをして、さまざまの人形にんぎょうを使つかいました。けれどもたいへん下手へたですから、見物けんぶつ人にんがさつぱりありませんで、非常ひじょうに困こまりました。「甚兵衛じんべえの人形にんぎょうは馬鹿ばか人形にんぎょう」と町の人々たむけはいつていました。

甚兵衛じんべえは口惜くやしくてたまりませんでした。それでいろいろ工夫くふうをして、人形にんぎょうを上手じょうずに使おうと考えましたが、どうもうまくゆ

きません。しまいには、もう神様に願うよりほかに、仕方がないと思いました。

どの神様がよかろうかしら、と甚兵衛はあれこれ考えてみました。町にはいくつも神社がありましたが、上手に人形を使うことを教えてくださるようなのは、どれだかわかりませんでした。さんざん考えあぐんだ末、いつそ人のあまり詣らぬ神社にしよう

と、一人できめました。

町の裏手に山がありまして、その山の奥に、淋しい神社が一つありました。甚兵衛は毎日、そこにお詣りをしました。あたりに大きな杉の木が立ち並んでいて、昼間でも恐ろしいようなところでした。けれども甚兵衛は一心になって、どうか上手な人形

使いになりますようにと、神様に願いました。

ある日のこと、甚兵衛はいつものとおりに、その神社の前に跪いて、長い間お祈りをしました。そしてふと顔をあげてみますと、自分のすぐ眼の前に、真黒なものがつつ立っていました。甚兵衛はびっくりして、あつ！ といったまま、腰を抜さんばかりになつて、そこに倒れかかりました。するとその真黒なものが、からからと笑いました。甚兵衛は二度びっくりして、よくよく眺めますと、それは一匹の猿でした。

「甚兵衛さん、甚兵衛さん」と猿はいいました。

甚兵衛は口をあぐり開いたまま、猿の顔を眺めていました。それを見て猿はまた笑いだしながら、いい続けました。

「甚兵衛さん、なにもびつくりなさることはありません。私はこの神社おみやに長く住すんでいる猿さるであります。人間のように口くちを利きくこともできませんし、どんなことでもできます。あなたが毎日熱ねっし心こころにお祈いのりなさるのを感じして、上手じょうずに人形にんぎょうを使うつかうことを教おしえてあげたいと思つて、ここにでてまいつたのです。けれどもその前に、あなたに一つお頼たのみしたいことがあります。聞きいてくださいますか」

そういう猿さるの聲こゑがたいへんやさしいものですから、甚兵衛もようよう安心あんしんしました。そして答こたえました。

「お前まへさんが私わたしを上じょうず手てな人形にんぎょう使いづかいにしてくれるなら、頼たのみを聞きいてあげよう」

そこで猿さるはたいそう喜びよろこまして、頼たのみの用をうち明けました。

用というのは、大蛇おろちを退治たいじすることでした。いつの頃ころからか、山に大蛇おろちがでてきました、いろいろな獣けだものを取つては食たべ、猿さるの仲間なかままでも食たべ初めしました。それでこの猿さるは、さまざまに工夫くふうをこらして、大蛇おろちを山から逐おい払はらおうとしましたが、どうしても敵かないませんでした。そして甚兵衛じんべえに、大蛇退治おろちたいじを頼たのんだのでした。

「お前はなんでもできるといったのに、大蛇位おろちぐらいなものに負まけるのかい？」と甚兵衛はいいました。

「はい」と猿さるは面めん目ぼくなさそうに答こたえました。「智慧ちえでなら誰たれにも負まけません、力ちからづくのことは困こまつてしまいます。甚兵衛さん、どうかその大蛇おろちを退治たいじしてください」

甚兵衛もそれには困りました。なにしろ相手は大蛇ですもの、へたなことをやれば、こちらが一呑みにされてしまえばかりです。長い間考えこんでいましたが、いい考えを思いついて、はたと額を叩きました。

「そうだ、これなら大丈夫。ねえ猿さん、お前は猿智慧として、たいそう利巧だそうだが、案外馬鹿だなあ。今私が大蛇を退治てあげるから、見ていなさいよ」

甚兵衛は急いで家へ帰りまして、綺麗な女の人形を一つ取り、その中に釘をいっぱいつめて、釘の尖った先が、皆外の方に向くように拵えあげました。それを持って猿の所へもどつてきました。「そんな人形をなんになさいます？」と猿は不思議そうに尋ねま

した。

「まあいいから、私のすることを見ていなさい」と甚兵衛は答こたえ
ました。

彼は猿かれさるに案内あんないさして、大蛇おろちのでてきそうなところへ行き、そ
こに女の人形を立たせました。そして猿さると二人で、大蛇おろちに見つか
らないような蔭かげに隠かくれて、じつと待まっていました。

しばらくすると、ごーと山鳴なりがしてきまして、向むこうの茂しげみの
間あいだから、樽たるのように大きな大蛇おろちが、真赤まっかな舌したをぺろりぺろりだし
ながら、ぬつと現あらわれでました。大蛇おろちは人形を見ると、それを生
きた人間と思つたのでしよう、いきなり大きな鎌かまく首びをもたげて、
恐おそろしい勢いきおいで寄よつてきました。そして側そばに寄よるが早いよか、その大

きな身体からだで、ぐるぐると人形に巻まきついて、力ちからいっぱいにしめつけました。ところが人形には、薄うすい着物きものの下に釘くぎがいっぱい、尖とがった先さきを外むに向けてつまっているのです。いくら大蛇おろちでもたまりません。柔やわらかな腹はらの鱗うろこの間に、一面めんに釘くぎがささりまして、そこから血ちが流ながれだし、そのまま死しんでしまいました。

二

首尾しゆびよく大蛇退治おろちたいじができましたので、猿さるはたいへん喜よろこびました。「お蔭かげで山やまの中の獣けものは、皆助みなたすかります。これから、お約束やくそくですから、上じようず手に人形にんぎようを使うつかうことを、あなたにお教おしえしましょう。

ただ黙だまつて、私のいうとおりになさらなければいけませんよ」

甚兵衛じんべえは承知しやうちしました。猿さるは甚兵衛の家へやつてきました。

そして家にある人形を皆みな売つてしまいなさいといたしました。甚兵衛は人形を残のこらず売つてしまいました。すると猿さるはいいました。

「三日の間あいだ、この人形部屋べやにはいつてはいけません。三日たったらこの部屋へやにおいでなさい、すると大きな人形が一つ立っています。その人形はなんでも、あなたのいうとおりひとりにでうごきます」

甚兵衛じんべえは不思議ふしぎに思いましたが、ともかくも猿さるのいうとおりにして、三日間人形部屋べやの襖ふすまを閉め切つて置おきました。猿さるはどこかへ行つてしまいました。三日たつてから、甚兵衛はそつと人形部べ

屋やを覗のぞいてみました。すると部屋へやの真中まんなかに、大きなひよつこの人形が立っています。

甚兵衛はびつくりしましたが、猿さるの言葉ことばを思いだして、手をあげろと人形にいつてみました。人形はひとりでに手をあげました。歩けと甚兵衛はいつてみました。人形はひとりでに歩きだしました。それから、踊おどれといえは踊おどるし、坐すわれといえは坐すわるし、人形はいうとおりに動うごき廻まわるのです。甚兵衛は呆あきれ返かえってしまいました。そしてぼんやり人形を眺ながめていますと、その背せ中なかが、むくむく動うごきだして、中から、猿さるが飛とびだしてきました。

「甚兵衛さん、びつくりなすつたでしょう。なあに、私が中にはいつていたんです。あの人形は空からつぽで、背せ中なかに私の出入口がっ

いてるのです。大蛇おろちを退治たいじてください。これからお礼に、これから私が人形おどを踊おどらせますから、それであなたは一儲もうけなさい。私も山の中より町の方が面白おもしろいから、御飯ごはんだけ食たべさしてください。長くあなたの側そばに仕つかえて、人形を踊おどらせましょう。

なるほど猿さるが中ちゆうにはいつておれば、人形がひとりひとりでに踊おどるのも不思議ふしぎではありません。甚兵衛は手てを打うつて面白おもしろがりしました。

やがて町の祭さいれい礼れいとなりますと、甚兵衛じんべえは一番賑にぎやかな広場ひろばに小舎こやがけをしまして、「世界一の人形使ひとい、独ひとりで踊おどるひよつとこ人形」という看板かんばんをだしました。町の人たちは、あの馬鹿ばか甚兵衛じんべえがたいそうな看板かんばんをだしたが、どんなことをするのかしらと、面白おもしろ半分はんぶんに小舎こやへはいつてみました。

正しょうめん面に広い舞台ぶたいができていました。間まもなく甚兵衛は、大きなひよつとこの人形もを持ちだし、それを舞台ぶたいの真まんなか中に据すえまして、自分は小さな鞭むちを手に持ち、人形の側そばに立つて、挨拶あいさつをしました。

「この度たび私が人形をひとりで踊おどらせる術じゆつを、神かみから授さずかりましたので、それを皆みなさま様にお目にかけます。このとおり人形には、なんの仕掛しかけもございません」

そういつて彼かれは、手の鞭むちで人形を二、三度叩どたたいてみせました。それから鞭むちを差さしあ上げていいました。

「歩いたり、歩いたり」

人形は歩きだしました。

「廻つたり、廻つたり」

人形はぐるぐる廻りました。

「踊つたり、踊つたり」

人形はおかしな恰好で踊りました。

「飛んだり、跳ねたり」

人形は飛び跳ねました。

見物人は驚いてしまいました。なにしろ人形が独りで動き廻るの、見たことも聞いたこともありません。皆立ちあがって、

やんやと喝采しました。中には不思議に思う者もあつて、舞台を調べてみたり、人形を検査したりしました。けれどももとより、舞台にはなんの仕掛もありませんし、猿は人形の中にじつと屈ん

でいますので、誰だれにも気づかれませんでした。そして、やはり、甚兵衛じんべえは神様かみさまから人形使いほんぎょうの法ほうを教おそわったということになりました。さあそれが評判ひょうばんになりました、「甚兵衛の人形は生いき人形ほんぎょう」といひはやされ、町の人たちはもちろんのこと、遠とおくの人まで、甚兵衛の人形小屋ごやへ見物けんぶつに参まいりました。

三

町の祭さい礼らいがすみますと、猿さるは甚兵衛じんべえに向むかつて、都みやこにでてみようではありませんかといいました。甚兵衛もそう思おもつてたところいなかです。田舎いなかの小さな町では仕方しかたがありません。大きな都みやこにでて、

世間せけんの人をびつくりさせるのもたの楽しみです。それでさつそく支度したくをしまして、だいぶ遠い都とおみやこへでてゆきました。

甚兵衛みやこは、都の一番賑にぎやかな場所ばしょに、直ただちに小屋こやがけをしまして、「世界一の人形使い、独ひとりで踊おどるひよつとこ人形」という例れいの看板かんばんをだしました。すると、甚兵衛の評判ひやうばんはもうその都みやこにも伝つたわっていますので、見物人けんぶつにんが朝からつめかけて、たいへんな繁昌はんじやうです。甚兵衛は得意とくいになって、毎日ひよつとこの人形おどを踊おどらせました。

ところがある日、甚兵衛じんべえは例れいのとおり、「歩いたり、歩いたり、……踊おどったり、踊おどったり、……飛とんだり、跳はねたり」などといつて、自由じゆうじざい自在じざいに人形おどを使つかっていますうち、つい調子ちやうしにのつて、

「鳴いたり、鳴いたり」と口を滑らせました。けれども人形は一向鳴きませんでした。さあ甚兵衛は弱つてしまいました。でも一度いいだしたことですから、今さら取消すわけにはゆきません。甚兵衛は泣きだしそうな顔をして、人形の中の猿にそつと頼みました。

「猿や、どうか鳴いてくれ、私が困るから」

「では泣きましょう」と猿は答えました。

そこで甚兵衛は鞭を高く差上げ、大きな声でいいました。

「鳴いたり、鳴いたり」

人形は「キイ、キイ、キヤツキヤツ」と鳴きました。

見物人は驚いたの驚かないの、それはたいへんな騒ぎになり

ました。「人形が鳴いた」という者もあれば、「あれは猿の鳴き声だ」という者もあるし、一度に立ちあがってはやし立てました。すると甚兵衛は一きわ声を張りあげていました。

「今のは猿の鳴き声であります。これからまた他の鳴き声をお聞かせいたします。……さあひよつとこ人形、鳴いたり鳴いたり、犬の鳴き声」

人形は「ワン、ワン、ワン、ワンワン」と鳴きました。

「鳴いたり鳴いたり、猫の鳴き声」

人形は「ニヤア、ニヤア、ニヤア、ニヤア」と鳴きました。

「鳴いたり鳴いたり、鼠の鳴き声」

人形は「チュウ、チュウ、チュウ、チュウ」と鳴きました。

「鳴いたり鳴いたり、狐の鳴き声」

人形は「コン、コン、コンコン」と鳴きました。

「鳴いたり鳴いたり、狸の鳴き声」

すると見物人は喜びました。誰もまだ、狸の鳴き声を聞いた

者がありませんでした。皆静まり返って耳を澄しました。ところ

が、いつまでたつても人形は鳴きません。甚兵衛はまたくり返し

ました。

「鳴いたり鳴いたり、狸の鳴き声」

それでもまだ人形は鳴きませんでした。鳴かないのも道理で

す。人形の中の猿は、狸の泣き声を知らなかつたのです。甚兵衛

はそんなこととは気づかないで、三度くり返しました。

「鳴いたり鳴いたり、狸の鳴き声」

すると人形は大きな声でこういいました。

「狸の鳴き声、知らない知らない、キイ、キイ、キヤツキヤツ」

それを聞くと、小屋の中は沸き返るような騒ぎになりました。

「狸の声を人形も知らない——人形が口を利いた——猿の鳴き声をした」とてんでにいいはやして、見物人のほうが踊りだしました。

甚兵衛は初め呆気にとられていましたが、やがて程よいところで挨拶をして、その日はそれでおしまいにしました。

甚兵衛と猿と二人きりになりますと、猿は顔から汗を流しながらいいました。

「甚兵衛さん、今日きょうのように困こまったことはありません。狸たぬきの鳴なき声を知らないのに、鳴なけとなん遍べんもいわれて、私はどうしようかと思おもいました」

「いや私もうっかりいつてしまつて、後あとで困こまつたなど思おもつたが、しかしお前まへが知らない知らないといつたのは大おほきだつた」

そして翌よくじつ日ひからは、踊おどりや鳴なき声を前まへからきめておいて、それだけをやることにしました。

四

ところがその都みやこに、四、五人で組くみをなした盗とうぞく賊ぞくがしまして、

甚兵衛の人形の評判ひょうばんをきき、それを盗み取ろうとはかりました。そしてある晩ばん、にわかにわかに甚兵衛の所へ押し入り、眠ねむつてる甚兵衛を縛りあげ、刀かたなをつきつけて、人形をだせと嚇おどかしました。甚兵衛はびっくりして、あたりを見廻まわしましたが、猿さるはどこかへ逃にげてしまつて居いませんし、まごまごすると刀かたなで切られそうですから、仕方しかたなく人形のある室へやを教おしえました。盗賊とうぞくどもは人形を奪うばうと、そのままどこかへ行つてしまいました。

盗賊とうぞくどもが居いなくなつた時、押入おしいれの中に隠かくれていた猿さるは、ようようでてきて、甚兵衛の縛しばられてる繩なわを解といてやりました。けれども盗賊とうぞくどもが逃にげてしまつた後あとなので、どうにも仕方しかたがありませんでした。ただこの上は、盗賊とうぞくの住居すまいを探さがしあてて人

形を取り返すかえよりほかはありません。

それから毎日、昼間ひるまは甚兵衛じんべえがでかけ、夜よるになると猿さるがでかけて、人形の行方ゆくえを探さがしました。けれどなかなか見つかりませんでした。ちようど半はんつき月つきばかりたつた時、その日も甚兵衛は尋ねたずあぐんで、ぼんやり家に帰かえりかけますと、ある河岸かしの木影こかげに、白しろひ髯げの占うらいな者しやが卓つくえを据すえて、にこにこ笑わらっていました。甚兵衛はその白しろひ髯げのお爺じいさんの前まへへ行いつて、人形の行方ゆくえを占うらつてもらいました。

お爺じいさんはしばらく考えていましたが、やがてこういいました。「ははあ、わかつたわかつた。その人形は地獄じごくに居いる。訳わけはないから取りに行くがいい」

甚兵衛はびっくりして、なおいろいろ尋ねましたが、白髯のお爺さんは眼をつぶったきり、もうなんとも答えませんでした。甚兵衛は家に帰って、その話を猿にいつてきかせ、占い者の言葉を二人で考えてみました。地獄に居るが訳はないというのが、どうもわかりませんでした。二人は一晩中考えました。そして朝になると、二人ともうまいことを考えつきました。

甚兵衛はこう考えました。

「これはなんでも、地獄に関係のある古いお寺か荒れはてたお寺に違いない」

猿はこう考えました。

「地獄のことなら鬼の思うままだから、鬼の人形をこしらえたら、

それであるの人形が取りもどせるだろう」

五

それから、猿さるは大きな鬼おにの人形をこしらえ、甚兵衛じんべえは荒れは
 てた寺てらを尋ねて歩きました。ちようど都みやこの町はずれに、大きな古
 寺てらがありましたので、甚兵衛はそつと中にはいりこんで様子ようすを
 窺うかがつてみますと、畳たたみもなにもないような荒れはてた本堂ほんどうのなか
 に、四、五人の男が坐すわつて、なにかひそひそ相談そうだんをしていまし
 た。よく見ると、それがあの盗賊とうぞくどもではありませんか。甚兵
 衛はびっくりして、見られないように逃にげだしてきました。そし

て猿さるにそのことを告つげました。

「もう大丈夫だいじょうぶです」と猿さるはいいました。「人形とうぞくは盗賊とうぞくどもの所ところにあるに違ちがいありません。私わたしが行いって取りもどしてきましょう」
甚兵衛あぶは危あぶなかりましたが、猿さるが大丈夫だいじょうぶだというものですから、そのいうとおりに従したがいました。

晩ばんになりますと、二人ふには鬼おにの人形にんぎょうをかついで、盗賊とうぞくの古寺ふるでらへ行いきました。それから猿さるは人形にんぎょうの中なかにはいつて、一人ひとりでのその本堂ほんどうにやっつてゆきました。本堂ほんどうの中なかには蠟燭ろうそくが明るくともつていましたが、盗賊とうぞくどもは酒さけに酔よつ払はらつて、そこにごろごろ眠ねむっていました。

「こら！」と猿さるは人形にんぎょうの中から大きな声こゑでどなりました。

盗賊どもはびっくりして起きあがり、目の前に大きな鬼がつつ立つてゐるではありませんか。みんな胆をつぶして、腰を抜してしまいました。

鬼の人形の中から、猿は大きな声でいいました。

「貴様どもは悪い奴だ。甚兵衛さんの生人形を盗んだらう。」

あれをすぐここにだせ、だせば命は助けてやる。ださなければ八裂きにしてしまふぞ」

「はい、だします、だします」と盗賊どもは答えました。

やがて盗賊どもは、生人形を奥から持つてきましたが、

首はぬけ手足はもぎれて、さんざんな姿になつていました。それも道理です。盗賊どもは人形を踊らして、金儲けをするつも

りでしたが、中に猿さるがはいっていないんですから、人形は踊おどれようわけがありません。盗賊とうぞくどもは腹はらを立てて、人形の首ひを引きぬき、手足をもぎ取つて、本堂ほんどうの隅すみつこに投げ捨すてて置おいたのです。それを見て猿さるは、鬼おにの人形の中からどなりつけました。

「不都合ふつごうな奴やつだ。しかしおとなしく人形をだしたから、命いのちだけは助たすけてやる。どこへなりといつてしまえ。またこれから泥坊どろぼうをするゆると許ゆるさんぞ」

盗賊とうぞくどもは震ふるえあがつて、逃にげうせてしまいました。

猿さるは鬼おにの中からでてきて、甚兵衛と二人で、壊こわれた人形を抱だいて、非ひ常じょうに悲かなしみました。けれども、いくら悲かなしんでもいまさう仕方しかたはありません。二人は壊こわれた人形もを持つて、田舎いなかの町かえへ帰

りました。

甚兵衛はもうたいへん金を儲けていましたし、壊れた人形を見ると、再び人形を使う気にもなりませんでした。猿も都を見物しましたし、そろそろ元の山にもどりたくなつて折でした。それで二人は、壊れた人形を立派に繕つて、それを山の神社へ納めました。猿は山の中へもどりました。

甚兵衛は、もう誰が頼んでも人形を使いませんでした。そして山からときどき遊びにくる猿を相手に、楽しく一生を送りました。そうです。

青空文庫情報

底本：「天狗笑い」晶文社

1978（昭和53）年4月15日発行

入力：田中敬三

校正：川山隆

2006年12月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

人形使い

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>